

## 母なる大地とともに

生きる権利と環境保全の両立をめざして—ケクチ農村開発プロジェクト・コニック支援

この文章は二〇〇四年に日本ラテンアメリカ協力ネットワークにて発表されたものです。

青西靖夫

グアテマラ東部のイサバルリビングゲストーンでのプロジェクトを開始するた  
めに現地を最初に視察したのは20  
00年12月です。それからほぼ4  
年が経過しましたが、これまでどの  
ような活動行ってきたのかあらため  
て整理したいと思います。

### なぜリビングゲストーンだったのか

グアテマラでの農村開発、特に先  
住民コミュニティの支援はこれまで  
グアテマラ西部が中心で、グアテマラ  
東部における活動というのは非常に  
限られていました。今回プロジェクトを  
実施しているイサバル県は首都から  
のアクセスも悪く、村へも車では入れ  
ません。それにコミュニティの規模も  
小さく点在している、というようにな  
ことからなかなか支援が届きません  
でした。

しかしこのイサバル県で、土地を求める運動  
が高まり、コックス先住民民族農民全国調整委  
員会)に参加するコミュニティが増えてきたこと  
から、日本ラテンアメリカ協力ネットワークで  
はコックとともにこの地域でのプロジェクトを  
実施していくことになりました。

### ケクチ系マヤ民族のコミュニティ

プロジェクトを実施しているコミュニティの住  
民はほぼケクチ系のマヤ民族です。平地には牧  
草地を中心とした大農園が広がり、山の中に  
トウモロコシ耕作に依存するケクチの人々のミ  
ニティがあります。伝統的に移動耕作を行っ  
てきたケクチの人々は、土地を求めて少しずつ  
この地域にも移動してきたものと思われま  
す。しかし政府主導の「開発」計画のなかで道路建  
設が進められ、それと同時に土地はどんどん困  
い込まれ、焼き払われ、放牧地となっていまし  
た。

こつした中でコックに参加するコミュニティ  
は、自分たちの土地に対する権利を確立するた  
めに土地運動を展開してきました。運動には  
様々な形があります。一つには、これまで耕作し  
てきた土地が国有地内にある場合で、その場合  
には国の「土地基金」による登記を求めること

になります。不当に大農園等に分配された国  
有地内にコミュニティの土地があり、その回復を  
求めるケースもあります。また既に回りの土地  
を困い込まれ、行き場のない農民は、遊休地を  
利用しつつ、その土地の所有権の所在を確認し  
つつ、土地(購入)登記の進められるケースも  
あります。

これ以外にも、石油開発・鉱山開発の利権と  
の問題、環境保護区との問題、また軍政下で違  
法に進められた土地分配の問題などこの地域  
の土地問題は複雑です。

この地域での人々の活動は、不当に奪われた  
土地を回復すること、あるいは国有地の分配を  
求めることから始まり、その土地を登記し、家  
を建て、村を作り、学校を作り、そして生活を  
安定させていく、という長い取り組みとなりま  
す。

### ケクチの人々の農業と生活

ケクチのコミュニティはトウモロコシの耕作を  
中心に成り立っています。森を拓き、トウモロコ  
シを耕作し、しばらくしてまた違う土地に移り  
ます。毎年新たに森を拓くのではなく、一度開  
墾した土地を一年、二年使っては休ませるとい

う形でローテーションをしています。

しかしこうした生活にも限界があります。現金収入源としてはトウモロコシの価格は安く、また売るためには相当広い面積でトウモロコシを耕作しなくてはなりません。しかし土地が減ってきて十分に土地を休ませることもできない、という問題も出てきました。その一方で、適切な現金収入源となる代替作物の耕作も進んでおらず、この

こつした中で、新たな現金収入源の確保とトウモロコシ生産の安定というのが初年度のプロジェクトのテーマとなりました。

## 2001年のプロジェクト

2001年はコツクの農業普及チームとともに、現金収入源としての新作物の導入に取り組みました。新規に雇用された普及員がパイナップルを導入し、いくつかのコミュニティで植え付けを開始しました。しかし当時の普及員がケクチ語を話せなかったこともあり、コミュニティとの意志疎通が十分でなかったことなどから、コミュニティの参加は得られず、コミュニティのなかの数



協議を実施しました。

## 2002年以降のプロジェクト

前任者がマリアアなどのために離職し、半年たつてようやく後任の普及員が見つかりました。農業が専門というわけではないものの、当初から望んでいたケクチの普及員です。新普及員とは農業面に特化するのではなく、コミュニティの組織強化という視点から、コミュニティの数を絞り、コミュニティと議論し、計画を一緒に作って、実施していくというプロセスを重視するという方向でプロジェクトを再開しました。

普及員は村人とともに、村の抱える問題を議論し、整理した上で、優先課題を定め、解決策を探してきました。もちろん土地問題は人々の最優先課題で、これはコミュニティの人たちがコツクと調整しながら自分たちで解決していきます。

## プロジェクトはやってるもの？

グアテマラでは黙っていても行政が基本的なサービスを提供してくれるわけではありません。コミュニティの学校や、電気、水道といった基本的なインフラの整備に関しても自分たちで、政府機関や自治体に働きかけていく必要があります。多くの場合こうした基本的なインフラに関しては、村人の中に明確なイメージがある上に、だいたい決まった形式があることから村人たちは自分たちで解決していきます。

しかしそれ以外の話となると、自分たちのコミュニティでどのようなことができるのかはつきりしなくなります。情報が限られている中で、自分たちのコミュニティで何ができるのかを考えることはとても難しい作業です。そこで何かやってくれるのを、「プロジェクト」を待つ、ということになります。

また外部の機関も、村人に相談することもなく、勝手にプロジェクトを持ってきます。コミュニティの人たちにとって、プロジェクトはやってくるものでした。村人も外から持ってきてくれるものに敬意を払い、とりあえず尊重して受け入れてあげるといって、不思議な共存関係が成立しています。

## 「何をやるか決めて下さい」

こうした中で、今回のプロジェクトでは、何をやるか決めて下さい」と持ちかけました。農業なら、何を植えて、どうやって管理するのか、何を結果として求めるのか。必要なら計画のために視察などを設定もしました。

村の人たちにとっては、これは少々意外なものであったようです。誰かが何かを持ってきて解してくるのではない。自分たちで何かしなくては何も進まない。そうした中で、小さな農業プロジェクトのアイデアがいくつかでて、実施されました。

一つのコミュニティでは、協同での米の栽培に取り組みました。全く経験がなかったわけではないので、元々の手法に、少し播種法を変えてみたり、新品種を導入してみたりしました。



初年度の米栽培は成功に終わり、種子が十分に確保され、米の栽培は各家族に広がりました。また種子用以外の収穫は販売され、コミュニティの共同

銀行の資金として自主的に積み立てられ、運用されています。

別のコミュニティでは、なかなかグループで活動を作っていくことができなかったものの、視察に行き、とりあえずカルダモモの植え付けを行うとみるという判断を出して、すこしずつ動いているところもあります。こうした中で、組織として議論をして、合意を形成して、責任を持って動いていく、というコミュニティの組織強化が進みつつあります。

最初から最後まで、ずっと「家畜」と決めて、他の話には目もくれなかったコミュニティとは、最終的に家畜飼育のプロジェクトを実施することとなりました。その村はもともと時々冠水してトウモロコシには適さない牧草地を持っていて、家畜を預かって放牧していたりする経験があったことなどが方向を定めるのに役立ちました。女性たちも何かをやりたいと、モラルという袋を織る活動をはじめたところもあります。やってみたら売るのは難しい、という意見も出ています。が、それでもやり方を覚えて、自分で工夫してみたり、またグループで違う活動に取り組んでみたり、と主体的に色々なことに取り組んでいます。

もちろん、失敗している活動もあります。何かを植えてみたけれどダメだった…とか。です

が、与えられてやってみた活動とは異なる結果を残しているように思えます。自分たちで決めて、やってみた活動は失敗しても、そこから何かを学び取ることができます。

## 小さなものでも、近くで売れば

初年度のプロジェクトの後、忘れられていたパイナップルも、他のコミュニティで成功している話を聞いて、ちゃんと手入れをするところも出てきました。近くの村で売ったりして、ちょっとした現金収入源となりました。村の中で株分けをして自分たちの土地に植えている人も増えていきます。こうして皆が植え始めたら近くの市場はあつという間に飽和してしまつかもしれません。しかし、これまで売るのがなかったところから売ることができ、それが地域内で循環し始めるというところは重要なことです。とりあえずお金は地域の中で回り始めます。女性たちのモラルでも同じことです。皆、モラルのような袋を購入して使っているわけですが、それが地域のなかで生産されれば、外から購入しなくても済みます。小さな規模ですが、少しずつ地域の中でもものが動き、お金が動き、地域が活性化していく可能性を感じます。

## コミュニティの安定と持続性を目指して

コミュニティの内部にいくつかの現金収入源が確保されること、プロジェクトの成果の中からコミュニティの資産としてながしかの余剰が留保されつつあることなどはコミュニティの安定のために重要な要素だと思います。

さらに、農業の持続性という点からは、緑肥の導入が進んでいることは重要な一歩です。既にくつかの家族が緑肥の導入を進めていますし、グループで試験的に取り組んでいるところもあります。

またトウモロコシに代わる現金収入源があれば、トウモロコシの耕作面積を広げずに済み、その分、休閑させる可能性が増え、土地の疲弊を防ぐことにつながります。こうした点からも、このプロジェクトはいい方向に進んでいるように思われます。

## この先のプロジェクト

これまでの成果を踏まえ、今後この地域での活動を継続・拡大していくことを考えています。活動対象コミュニティを広げながら、コミュニティの組織強化を目指した、小規模プロジェクトの実施、女性組織強化、持続的な資源管理、

資源利用を確立するための研修・農民間の交流事業などを行い、コミュニティの安定的なそして持続的な開発を目指しています。

## ケクチ系マヤ民族の土地に対する権利の

### 確立を支援します

マヤの人々にとって、「母なる大地」は自らの文化の中心であるとともに、重要な生活の基盤でもあります。土地さえあれば、家を構えることもできるし、トウモロコシを耕作して生きていくことができます。土地はケクチの人々が生きる権利を確立する第一歩です。

### コミュニティの開発と組織強化

コミュニティの開発には、地域住民組織を強化することがもつとも重要です。しっかりとコミュニティがあれば、様々な開発事業もうまく進んでいきます。このプロジェクトでは、参加型の農村開発を行う中で、更なる組織強化を目指していきます。

### 持続的な開発の実現

移動農業から、定着へ、ケクチの人々の生活は大きく変わろうとしています。新しい可能性は、様々な経験を知ることから生まれてきます。そこでこのプロジェクトでは、自然資源の持続的な利用を目指して、経験交流や研修などの活動を展開していきます。

母なる大地とともに 生きる権利と環境保全の両立をめざして

ケクチ農村開発プロジェクト・コニック支援

